「サイパンの日本・アメリカ統治再考–懐かしまれる日本？」

国際交流学科３年　小代有希子ゼミナール
執筆・編集　伊澤麻衣
発表者　伊澤麻衣・池田和陽・久保田優稀・廣島克哉・山地沙季・山口圭太
指導教員　小代有希子教授

１.はじめに

北マリアナ諸島の一つサイパン。この島は太平洋戦争以前の、スペイン・ドイツ・日本統治と、それ以後のアメリカ統治を経験してきている。1944 年７月サイパン戦で日本が敗北するとサイパンは米軍に占領支配された。今日ガラパンにあるアメリカ戦争記念博物館に行くと、日本植民地から解放されたサイパンは、アメリカのおかげで「より良い」所になり、人々は幸せになったというような展示説明がある。しかし今日のサイパンは、アメリカ合衆国領土の一部として最も貧しい地域であり、豊かなアメリカ社会とは非常にかけ離れている。日米両方の統治時代を経験した島民、チャモロ人やキャロリニアンのお年寄りたちの中には「日本時代の方がましであった」という人たちも少なくない。こうした声を初めて聞いたゼミ生は、それを日本人へのお世辞と考えた。しかし毎年サイパン研修のたびに似た意見を聞くことがわかってくると、島の人々の声を冷静に聞いて歴史的事実を考えてみようと思った。日本統治時代とアメリカ統治時代を比較すると、どのようなことが見えてくるだろう。そして今日のサイパンの人たちは何を考えているだろうか。以下、島の人々ーチャモロ人・キャロリニアン人―のたどった 20 世紀を概観し、その後日本とアメリカの狭間を生きぬいた２人のチャモロ人の話しを紹介する。そして最後に今後のサイパンはどうなるのか考えたい。

2. 日本統治時代

1919 年、第一次世界大戦で戦勝国となった日本はベルサイユ講和条約によりミクロネシアを委任統治することになった。日本は国際連盟の評価を意識しながらサイパンを統治し、満州事変後国際連盟を脱退してもなおその国際評価に気を配った。1920 年～30 年代前半にかけて、南洋庁は製糖業を中心とした地域開発を行った。そのために南洋群島の総面積の 77%を製糖会社に安価で貸し与え、サトウキビの栽培を奨励した。南洋庁は、製糖業だけでなく漁業・鰹節製造にも力を入れた。例えば 1933 年南洋興発がパラオ・サイパンに設立した鰹節工場は、日本内地の全消費量の約 50%を供給していた。それ以外にもリン鉱石やボーキサイトの採掘などを進めた結果、南洋全域はめざましい経済発展を遂げ、1930 年代を通して日本本国からの援助金に頼ることなく財政的に自立していった。

このような経済開発の過程で、サイパン島にはさまざまな産業が栄え島の人々は就労機会を得ることになったが、全員が統治者日本人の言いなりになって貧しく苦しい生活をしていたわけではなかった。男性はサトウキビ畑で働く肉体重労働、女性は日本人家庭のメイド、売り子などの職種が多かったが、それ以外に巡警、助教員、補助看護師、さらにホワイト・カラーの事務の仕事に就く者もいて、それぞ

れが様々なかたちでサイパン島の社会と経済活動を側面から支えた。島民の中には、商店や運送会社を経営し、日本人や日本企業に土地を貸し付けて蓄えた資金で日本風邸宅に住み、船や車を所有する人もおり、日本人でも彼らに頭があがらないというケースも珍しくはなかった。

こうした経済発展の背景にはどのような教育があったのだろうか。サイパンでは、1915 年『南洋群島小学校規則』の下、現地児童に徳育、国語、生活に必要な知識技能、修身奉公等を教育し、身体鍛錬、徳育、生活知能技能を育成することが教育目標となった。授業科目は、算数、日本語、歌唱、倫理に加え、織物、彫刻などであった。1926 年には同じミクロネシアであるパラオに木工徒弟養成所が設置され、1941 年には同学校で自動車機械工、電気工の養成も行われるようになった。つまり島の子供の通う学校は、技術を教える職業訓練所のような役割を果たしたのだ。さらに特徴的なのは「情操教育」を行ったことである。日本への忠誠心を植え付けたのはもちろんだが「歌唱」のカリキュラムは注目に値する。日本統治下では日本語教育と歌唱教育がとても密接な関係を持っていて、南洋の学校で子供たちはリズムに合わせて楽しみながら日本語を学べるように工夫されていた。歌唱教科で使用するのは単音唱歌で、歌詞は意味を理解しやすい口語文のものを多く採用していた。さらに南洋地域が採択した国語の教科書には日本の民話や童話が多く載せられていた。島の子供たちは、唱歌を歌ったり学芸会の劇を演じたりしながら、心に残るような日本語に触れ、情操教育を受けていた。

日本植民地帝国統治下の教育というと、皇民化教育、強制的な日本語教育、徹底した日本化、といった冷酷なイメージがある。しかし南洋では、学校教育・社会教育は日本への親しみを促すような側面があったようだ。それで労働環境や生活環境において、日本人と島民が近い存在にあったのかもしれない。

３．アメリカ統治

1944 年 6 月、アメリカ軍はサイパン島に上陸し、日本軍と激戦を繰り広げた。7 月にサイパンが陥落し、以後アメリカ統治が始まる。冷戦が始まると、アメリカはミクロネシアを「海の生命線」にしようとしたが、アメリカが日本に代わって始めた統治はどのように展開していったのだろうか。

1952 年から 62 年までサイパンは安全保障上の理由からアメリカ海軍が統治を行った。つまり島の人々が相当に「日本化」していたため、彼らには「脱日本化」というリハビリが必要だと考え、それが完了するまでは彼らは信用できないと考えたのだ。1947 年には、国際連合の戦略的信託統治領となる。さてアメリカは、太平洋諸島を「文明化」（＝アメリカ化）するためにも、島にアメリカ風生活様式を導入する必要があると考え、そのために英語教育の導入も始まった。しかしミクロネシア全体に対してアメリカが最も重視したのは、あくまで島々と海が持つ軍事基地的重要性であった為、島の経済復興や、島の人々の社会文化振興・教育福祉支援は全て二の次となった。

例えばサイパン島には、アジアにおける冷戦を戦うためにＣＩＡ秘密基地が建設され、台湾国民党やインドシナの諜報部員の養成や訓練が行われていた。そのため 1960 年代初め頃までサイパンだけでなくミクロネシア全体で、外国人の入域が厳しく制限された。また、マリアナ諸島周辺の海域はアメリカの核実験所として利用されるようになる。1954 年、ビキニ環礁において広島型原爆の約 750 倍の威力の核実験が行われた。その実験海域で漁業を行っていた日本漁船第五福竜丸に乗っていた 23 人の漁民

は被爆し、機関長が亡くなっている。広島と長崎に原爆を投下したＢ－29 機が発進したのが、サイパンの隣のテニアン島だったので、アメリカは日本とミクロネシアを「核」で結びつけたといえる。

こうしたアメリカの軍事優先の政策の下、サイパン島の経済発展は止まってしまった。日本統治時代、島の人々は海へ出て鰹節を作っていたが、核実験で海が汚染されると彼らは伝統産業でもある漁業を失ってしまった。農業に関しても同じことが言える。日本統治時代のサイパンは、島中にサトウキビ畑が広がり、その他にもコーヒー豆、タピオカ、パイナップルなどが栽培され、南洋一農業が豊かな島だった。しかし戦後、米軍がサイパン戦の死体や戦跡処理のために散布した「タガンタガン（強烈な繁殖力を持つ植物）」が島中に異常繁殖したことによって、島には他の農産物が育成できなくなってしまった。島を「安全保障上の基地」として確保したいアメリカは、戦前のように日本企業が経済進出をしてくることを嫌がったために、あえて島の農業価値を潰してしまったのだ。1950 年代末から 60 年代初め、日本がちょうど戦後復興を遂げていた頃、ミクロネシアの主要な輸出品といえば、戦争で破壊された兵器のスクラップくらいしかなかった。サイパンにもまったく産業が根付かなかった。

1961 年国連調査団がミクロネシアの実地調査を行ったが、彼らが見たアメリカ統治下の現実は、不十分な経済発展、貧弱な教育プログラム、住民の健康福祉への無関心、交通システムの未整備、軍事利用のために取り上げた島の人々の土地に対する不十分な補償などであった。国連調査団の批判を受けてケネディー大統領は、アメリカ指導のもと島の人々の生活水準を引き上げていく各種事業を提案した。しかし、1963 年のハーバード大学によるミクロネシア調査によれば、ミクロネシア全体の住民の平均所得は、日本統治時代の 1939 年時の３分の１に減っていた。さらに投資レベルにしても日本統治時代のものには全くかなわず、ハーバード大学調査団は、ミクロネシアの発展のために日本企業投資の自由化を提案するほどだった。

1970 年代、サイパンは観光業で島おこしを試みた。経済大国となった日本から、美しい海をめざす観光客が押し寄せ、島の経済は潤った。しかし日本のバブル崩壊がきっかけで観光産業は大幅に落ち込んでしまう。次にサイパンは縫製業界に目をつけた。米国本土の５０％の最低賃金レベルでフィリピン、バングラディッシュ、中国などから労働者を呼び寄せ、島に何十と建造した縫製工場で働かせ、 Made in USA ラベルを付けたＴシャツや衣料を低コストで生産し、本土や海外に「輸出」することで成功した。サイパンで作られた国際的に人気のある「アメリカ製衣料」としては、GAP, Abercrombie & Fitch, Polo, Anne Klein, Jones New York などがある。しかしブッシュ政権下、米国会議は北マリアナ諸島政府に最低賃金を米国本土水準まで引き上げることを求めたため、縫製工場の人件費が大幅に上ってしまい、2008 年になると次々と縫製工場が閉鎖された。そして職を失った中国人・フィリピン人労働者の多くが不法滞在者として島に居残る事態となった。

軍事活動を統治の主な目的にしていたアメリカは、島の経済的自立には殆ど気を配らず、産業経済振興に関しても短期的、場渡り的政策が多く、長期的な計画な全くなかった。島民が消費する野菜、果実などの食品は輸入に依存しきっている。さらに島には就業の場がないため、アメリカからの（軍事基地提供の見返りとしての）福祉に依存しきってしまった人々が多い。高校生の多くは、米軍入隊を唯一の就職口として考えている。アフガニスタンやイラクで戦死したチャモロ人兵士の国立墓地も島に出来た。21 世紀の現在、サイパンの経済は現在危機的状況にある。そして島の将来的展望は全く見えない。

日本統治というのは、全くすべてが悪いというわけではなかった、のだろうか。

４．サイパンからの声

私たち小代ゼミ生は、毎年サイパン研修で、日本統治・アメリカ統治のどちらも経験したお年寄りに会って話しを聞いてきた。ここで２人のお年寄りの貴重な生の声を聞いてみることにする。

戦時中グアムで日本の兵隊に同行して通訳をしていたマニー・ビラゴメスさん。彼は日本とアメリカの両国に対して従軍経験を持っている。戦後アメリカ統治下でビジネスを始めて、以後着々と商売を拡大させてサイパンでも有数の富豪となった。日本での原爆投下慰霊にも出席したことがある彼だが、原爆投下のおかげで太平洋戦争が早く終わった、つまりアメリカの原爆投下を「必要」であったと肯定的に考える一人である。サイパンでは、1947 年 7 月 4 日は『解放記念日』として祝われている。７月４日は、アメリカ本土では「独立記念日」だが、サイパンも含む北マリアナではその日は、米軍収容所において２年間続いた「脱日本化リハビリ教育」が終了し、チャモロの人々が「自由」になった記念日でもある。マニーさんにとってこの日は、「日本からの解放」だそうだ。そして「アメリカ統治になって当然よかったよ。なんていってもデモクラシーだからね。戦後は自由だよ。」と言い切った。当時マニーさんは 20 歳だった。

マニーさんによると、日本統治時代島民は三等国民とされ、日本人の児童とは別の「公学校」にしか行けなかった。公学校では朝 6 時から学校、ラジオ体操をして、日本語の勉強が中心であった。先生は１人だが、日本語を話すことに慣れていない島の子供たちは日本人生徒とは違う教わり方をした。サイパンに住む日本人移民の子供は、島の子供たちより高い教育を受けられるので、常にマニーさんは日本人とは同じ水準には立てないという辛い思いがあったそうだ。しかしそれでもマニーさんは若い頃、多くの軍歌を覚えて唄っていたそうだ。確かに前述の「歌を使った教育」は浸透していたようだ。　またマニーさんは、そろばん算術が得意で、学年で一番の成績だったそうだ。日本語の九九は今でも完全に記憶していて、私たちに披露してくれた。「日本時代の教育はノウハウ（知識）を教えてくれた。戦後アメリカ統治になってからぼくが成功したのは、日本風の教育があったからだ」と話してくれた。日本のことわざで「成せば成る、成さねばならぬ、何事も」というのが今でも大好きだという。孫のような私たちに何度もこのことわざを繰りし、笑いながら「いいかね、この精神を忘れないようにしなさい」とおっしゃった。日本統治時代は差別があって、マニーさんにとって良い環境ではなかったが、だからこそこのことわざを信じて負けずに勉強をして結果を得てきた、と言う。戦後アメリカ時代に「デモクラシーと自由」を得てからも、『成せば成る』のことわざを胸に抱き、日本時代に養った学力を基礎に自分の力で這い上がり、富を得たのだ。

マニーさんの話を聞いていると、日本の兵隊の横暴で乱暴なのが嫌いで、しかも日本人に差別を受けたことが苦い思い出として今も残っているようだ。しかしアメリカ統治肯定派のマニーさんからも「戦前の日本統治は、兵隊がサイパンにいなかった頃は自由でよかった。日本が来てサイパンの経済が発展したのは事実だ」という意見を聞くことができた。アメリカが来てくれて助かった、アメリカのほうがずっと良い、といいつつ、日本時代をなつかしむマニーさん。私たちはどちらが彼の本当の気持ちであ

るのかわからなかったが、彼の中で日米の選択というのは、複雑な問題であることを理解した。

日本統治時代を懐かしむ人もいる。現在79歳のデービッド・サブランさん。彼はチャモロ人とカロリニアンのハーフなので両方の言葉を話すことが出来る。グアムの中学校に「越境通学」していたときに英語とスペイン語を習っており、もちろん日本語は今でもペラペラだ。彼のお父さんにいたっては7つの言語を話すことが出来たという。サイパン観光業・不動産業などの立役者で、サイパンでは「北マリアナ知事の次に力のあるリーダー」として知られている。

サブランさんが公学校5年生を卒業した年、日本とアメリカの間でサイパン戦が始まった。戦争中は他の日本人移民と同様、洞窟に逃げて米軍の攻撃を避けたという。1944年日本が敗北すると、お父さんが英語を話せたことからアメリカ軍につてが出来て、アメリカ軍のメッセンジャーとなり郵便局からの手紙を部署別に届ける仕事をした。その後お父さんがアメリカ軍から許可を得たので、サブランさんはアメリカ軍が運営する学校に2年間通い、さらに英語を上達させた。その後さらにグアムに渡りそこでしばらく働いた。本当はアメリカに行きたかったが、資金がなかったので、と語ってくれた。

サブランさんも、日本統治時代に通っていた公学校について思い出を語ってくれた。マニーさんの話しと同様に、児童は学校に来ると毎朝7時から7時半まで体操をする。1年生でカタカナの書き方を学び、2年生でひらがなを習い、3年生で簡単な漢字とそろばんを習った。サブランさんも、そろばんが得意であったので「偉い人」が日本から来るときは、必ず彼がクラスを代表してそろばんを披露したそうだ。公学校では、日本語、そろばん、農業の他に日本史も習ったそうで、内容は「オオミカミ（大御神）」や「日本の起源について」であった。午前中は算術と「読む事」を習い、午後は農業を学んだ。学校の裏に畑があったので毎日野菜を育てていたそうだが、サブランさんはそれを「おもしろかった」と話してくれた。児童が作った野菜はすべて売ったが、売り上げは全て学校に渡していたそうだ。学校行事では、運動会、マラソンなどがあり、熱心に練習に励んでいたと語ってくれた。彼もまた日本の歌のことに触れ「日本の歌は　大人の歌なら特によく覚えている」と語ってくれた。学芸会で『桃太郎』の劇をやり、サブランさんは「犬」の役だったことを今でもなつかしく覚えているそうだ。

日本統治時代、普段の食事は日本料理が当たり前だったので、今でも週に1回は日本料理を食べに行くという。当時のガラパンは東京と同じくらい繁栄していて、映画館や喫茶店などがあった。彼は特にサムライ映画を好んだという。友人との遊びで、彼は「すごろく」はやらなかったものの「野球」や「ケンケンパ」等、日本の遊びを良くしていた。ガラパンでは縁日もあったそうで、そうした当時のことを思い出して懐かしんでいるようであった。当時サイパン島を一周するサトウキビ列車が走るのを毎日見ていたそうだ。さらに日本統治時代にあった「サイパン病院」では、彼の親戚が救急車の運転手をしていたそうだ。チャモロ人の先生や看護婦もいたという。とにかく太平洋戦争前のサイパンはとても賑やかで経済もよく、日本人・沖縄人・チャモロ人・カロリニアン人みんな仲が良かったという。戦争が始まる直前から日本軍が入ってきて、それですべてが崩れていってしまったという。

「日本統治時代のサイパンでは米も野菜も育てていたので、食料を買う必要がなく、経済は良かった。いまサイパンは全部怠けになっている。」とサブランさんは語ってくれた。「日本は自分たちに生活の仕方を教えてくれた。だけどアメリカは常に“give”（援助）しかしなかった。」とまで言った。日本統治時代、島の子供たちは学校で農業やそろばん等を覚え、自立的生活を送れるようにしっかり、きび

しく教育されていたのが、戦後のアメリカ統治との違いなのだとサブランさんは締めくくってくれた。

５．おわりに

私たちのイメージする「日本統治下の植民地」というのは非常に悪い印象だが、日本の唱歌を懐かしみながら私たちに披露してくれるお年寄り、日本統治時代の経済発展を熱く語ってくれるお年寄りのことを考えると　救いようのない「負の遺産」というわけではないのかもしれない。

日本はかつて植民地の支配者側としてサイパンと関わってきたが、敗戦とともに　サイパンの行方に全く無関心に無責任に振舞うようになってしまった。私たちは　アメリカの軍事戦略の影となって経済的に苦しむサイパンに何ができるのだろうか。サブランさんは日本へのメッセージとして「サイパンのことを忘れないでください。私たちがしっかり歩んでいくためには日本の協力が必要です」と語った。サイパンの観光業を観光客として支えるだけでないどのような道があるだろうか。サイパンの自立のために日本は何ができるだろう。北マリアナ大学では、魚の養殖実験や島の農産物を加工したアイスクリームなどの商品開発などを行い、サイパンの経済的自立のために動き始めている。サイパンの豊かな自然環境を利用して、農業・漁業・養殖業などに　日本が技術提携することを考えた。しかしサイパンはアメリカ合衆国の一部であるので、こうした提携は全て日米関係の中で話し合っていかないとならない。昨年のフィールドワーク発表会で、小代ゼミは沖縄と北マリアナ諸島の米軍基地問題について発表したが、そのときも『日米関係からアプローチしないと何も解決しない』という結論を出した。日本とアメリカは、サイパンの新旧統治者同士として、チャモロ人・キャロリニアンの人々の声を聞き、サイパンの未来について話しあいをはじめるべきではないか。そしてサイパンの将来を考えるとき、アメリカはかつての日本統治時代を見直すことで、そこから学べることもあるのではないか、と思うのだ。

サブランさんとゼミ生

そろばんを前に語るマニーさん